

# 「(非) 記憶する文化」と日吉台地下壕 における言説の結果<sup>1)</sup>

ジャスティン・アウケマ

## はじめに

戦争体験者が少なくなりつつある現在では、日本に所在する第二次世界大戦からの旧軍事施設や空襲で被害を被った建物などが戦争を伝えるための重要な「戦争遺跡（略：戦跡）」として1990年より認識されるようになってきた。これらの動きは、ピエール・ノラが指摘した「記憶が具象的な場所、イメージやモノに定着する」という「記憶の場」(*lieux de mémoire*)、及びヤン・アスマンとジョン・カプリカが述べた「文書、祭祀や記念碑」にモノ化された記憶である「文化的記憶」(*cultural memory*)の世界的な普及という背景に位置付けることができる<sup>2)</sup>。その上で、戦跡はローラジェーン・スミスが「意味やアイデンティティを構築する社会的・文化的過程である」として説明した「遺産」にまつわるより広い言説に合流した<sup>3)</sup>。本論文は、この文脈において注目を集めた、横浜市郊外の慶應義塾大学日吉キャンパスの地下に存在する、「日吉台地下壕」と呼ばれる総距離5キロに及ぶ巨大地下壕施設の戦跡の歴史を探求する。戦争末期には、この場所は帝国日本海軍の連合艦隊司令部として使用された上、レイテ沖海戦（1944年10月）や沖縄戦（1945年4月－6月）等、最も被害が大きかった合戦を指揮する場所としても活用された。さらに、海軍は日吉から数多くの特攻隊員を死へと送り、また戦艦大和に対し運命的となった命令をした歴史もある。

本論文は、日吉台地下壕が、昨今の戦争や日吉地区、とりわけ慶應義塾の日吉キャンパスにまつわる言説が時代と共に多くの変化を遂げた過去の上に構築されてきた上、それらの言説が地下壕に関する歴史の重要な一部を形成するのみならず、「物理的なものとしての地下壕」及び「歴史的記憶における地下壕」に対する累積的な結果を引き起こしたと主張する。歴史的言説が時間と共に変遷してゆく中、失われたものや新たに取得されたものに焦点を当てることにより、本論文は「言説の中におけるモノの忘却と記憶」と定義する「(非)記憶する文化」という過程を証明する。ミシェル・フーコーによれば、有形的かつ無形的なモノは言説と言説空間に存在する<sup>4)</sup>。その中で、日吉台地下壕のような戦跡、及び記憶の場、歴史的遺産や文化的記憶のモノが当然含まれているわけであり、またこれらのものについては前述のスミスが「言説によって構成」されていると述べ、同様にデービッド・ハーヴィーが「言説による物理的な結果」であると断言した<sup>5)</sup>。これらのことと一致し、記憶そのものは少なくともある程度言説的

に構築されているという観念もある<sup>6)</sup>。故に、言説が時間と共に変遷してゆくと同時にモノも変わり、忘却されるかもしくは記憶されるということである。つまり、ある言説対象は他の言説対象によって代用されると、記憶する文化 (*Erinnerungskulturen*)は(非)記憶する文化へと変化する<sup>7)</sup>。かくして言説はモノや場所に対して、物理的かつ記憶的な結果を生じさせる。同時に、ルース・ウォダックとマイケル・マイヤーが指摘したように、モノや場所は必ず以前から構築されてきた「異なる言説や思想の痕跡を見せる」<sup>8)</sup>。さらに、これらの過去の言説や(非)記憶する文化の痕跡は累積的であるため、合わせてマリー・ルイス・ソレンセンとダシア・ヴィエオ・ローズが証明した「場所的自伝」(biography of place)と自伝的アイデンティティを構成するわけである<sup>9)</sup>。

本論文は、日吉台地下壕に特に大きな影響を与えた三つの(非)記憶する文化を突き止める。一つ目は、戦時中塾長であった小泉信三等の慶應義塾の有力者が戦争を支持していたこと、及びそれを主張・教育するために用いた、義塾の創立者であった明治期の知識者福澤諭吉の思想と像を中心に議論する。本論文は、これらのことを「愛国者としての福澤」言説と呼び、日吉台地下壕が日吉キャンパスの下に建設された背景にある重要な言説空間を構成したと指摘する。二つ目は、戦後直後における米軍による日吉キャンパスの占領、及び当時塾長であった潮田江次等慶應義塾の指揮者によるキャンパス返還の試みに焦点を当てる。変換の要請文では、潮田らは再び福澤諭吉の像を用いたものの、戦時中のような軍事的イメージ利用を控えめにし、彼を日本における自由民主主義の開拓者として描こうとした。本論文は、これを「近代リベラルとしての福澤」言説と呼び、この言説空間において日吉の戦争役割と戦争の跡は無かったものとされたことを示唆する。三つ目の(非)記憶する文化は、1980年代後半からの日吉台地下壕を「貴重な遺産」として再評価されたことと関係する。この「遺産言説」を訴える日吉台地下壕保存の会等の支持者は、積極的に地下壕にまつわる歴史と記憶に積極的に直面し、掘り起こそうとしてきた。しかし同時に、日吉における過去の言説による累積的な結果と争うことになった

## 1. 「愛国主義者としての福澤」言説と日吉の戦争史

慶應塾長鎌田栄吉(1898年-1922年)と小泉信三(1933年-1947年)は、教育は国家の要求に応じるべきだという戦前日本における仮説を積極的に支持した。二人は熱心に日本の戦争遂行を応援し、とりわけ小泉は日本帝国を褒め称え、敵米英を非難する数多くの国粹的な記事を執筆した。実際、当時多くの知識者は戦争を支持した。しかし他の知識者と慶應知識者の相違点は、鎌田・小泉は大学の創立者である福澤諭吉の思想と像を、国家的且つ軍事的目的のために利用したということにある。本章では、これらの言説、すなわち「愛国主義者としての福澤」という言説が、慶應義塾が学生を出征し、日吉キャンパスを帝国海軍に貸与し、そして最終的に日吉台地下壕が建設された歴史的・言説的背景を形成したということを主張する。

当然、露骨な軍国主義は福澤の本来の思想の目的ではなかったとはいえ、福澤が目指した強い独立した日本国家は軍隊への支援の上でできたわけである。なぜなら福澤の考えでは、個人の自由と国家の自由は相互関係にあったからである。要するに、片方では国家は個人の自由を保証すると同様に、もう片方では個人は国家の自由を守る義務があるということであった。そのため、福澤は教育を通して「独立の気力」がある国民を育てようとし、「独立の気力なき者は国を思うこと深切ならず」と述べた<sup>10)</sup>。また同様に福澤は、これらの考えを1858年に設立した慶應義塾の基礎的理念とし、それは後の慶應の卒業生や指導者に継承され、成文化された。例えば、1900年に福澤の弟子たちは塾生の規律を守るために福澤の思想を『修身要領』という書籍を作成することで広く普及させようとした。「独立自尊」という観念を踏まえ、『修身要領』は学生に、忠実なる国民として個人の自由を保障する国家と軍隊に奉公するよう要請した。ある箇所は、「日本国民は男女を問はず、国の独立自尊を維持するがためには、生命財産を賭して敵国を戦ふの義務あるを忘れ可らず」と強調した<sup>11)</sup>。

これらのことを踏まえ、慶應の知識者は福澤の「独立自尊」が忠君愛国を導く前提であることを主張し、また社会主義や個人主義の代わりになる健全な思想であると謳った。例を挙げると、1920年に慶應塾長であった鎌田栄吉は『三田新聞』で学生に対し、「混乱せる思想に迷はされず（中略）決して附和雷同する事なく（中略）独立自尊の精神に目覚めなければならない」と綴った<sup>12)</sup>。鎌田は、1927年から枢密院の一員、また1932年に帝国教育会議の会長として、国主導の最高レベルでこれらの考えを実行に移した<sup>13)</sup>。それに加え1931年の日本関東軍による満州占領以降、独立自尊を手法に帝国支配の基盤を強化するという鎌田の愛国的な解釈が一層激化した。例えば1933年に鎌田は、日本に古来よりある考え方の一つである「忠君愛国」を賛美し、またこれは「万世一系の皇室」と共に日本の「国体」を構成する上、他の国が持たない日本唯一の要素であると論じた<sup>14)</sup>。さらに鎌田は、日清日露戦争の勝利により日本は世界的な舞台で独立自尊を獲得できたという福澤の発言を反映し、現在の世界状況にも独立自尊という観念をもっと発揮すべきだと述べ、「国家緩急の場合に一身を投げて奉公の道に進むことは昔から今も変わらない。（中略）義勇奉公の精神を戦時にも平時にも等しく発揮するのが国民の公忠である」と説明した<sup>15)</sup>。

同様に、日本が1937年に日中戦争を勃発させた際、慶應の主導者は戦争を支持し、その裏付けのために福澤の思想を応用した。例えば1933年から1946年まで慶應の学長であった小泉信三は学生に対し、断固として国家のために命を捧げるべきだと促した。その一つの事例として1936年に小泉は、アメリカのハーバード大学を訪問した際、米記者よりもし日本が戦争になったらどうするかと尋ねられ、「自分はペンを捨てて、剣を持って戦う」と答えたことがある<sup>16)</sup>。また同様に、日中戦争が勃発した1937年の『三田新聞』で、彼は国家のために戦っている日本兵を高く評価し、学生に対し「諸君は若しも、戦局拡大して国家が諸君を戦場に要するに至らば直ちに起って飛丸の下に進み、諸君の忠烈決して今の将兵の忠烈に避けらざるべきはもとより諸君の期するところであらう」と寄稿した<sup>17)</sup>。小泉の戦争への支持は、福澤と実際に直接



【写真1】慶應義塾予科生が日吉キャンパスで教練を行う（慶應義塾福澤研究センター提供）

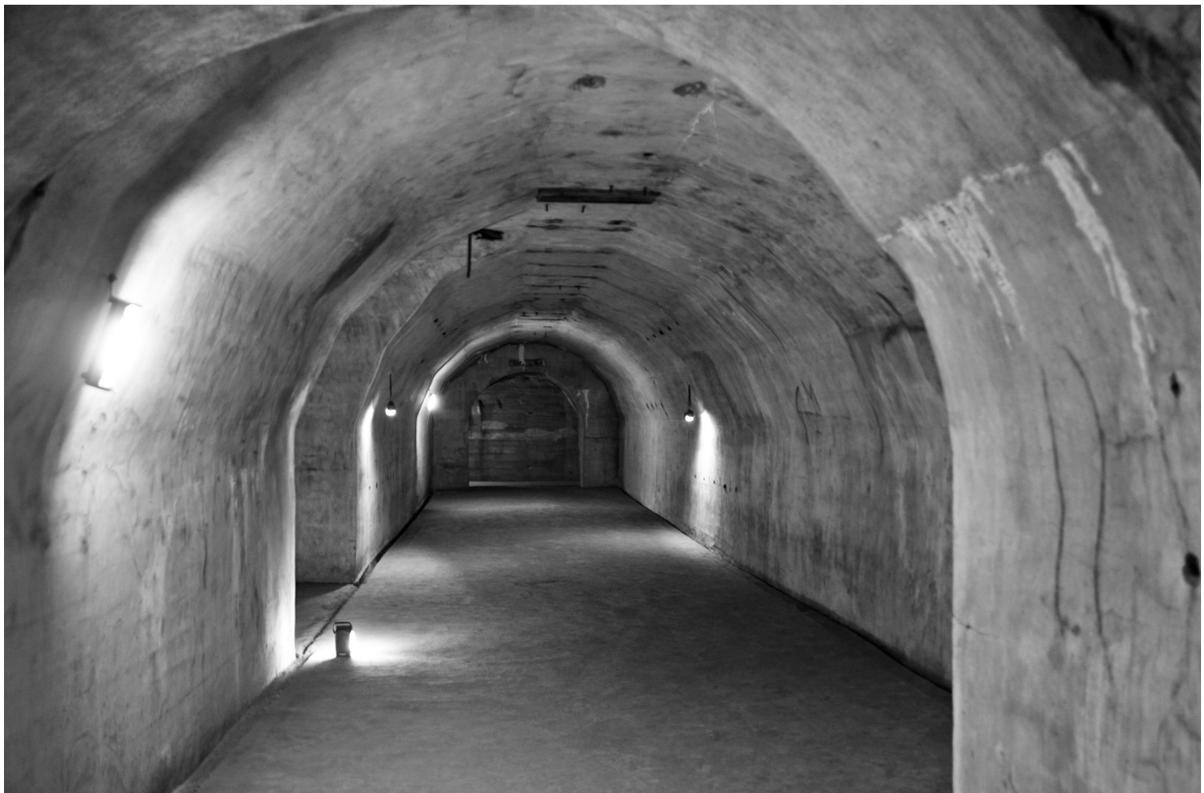
関わっていた経験、及び福澤の著書への深い理解から端を発した。例えば、同じ1937年の『三田新聞』の記事の中で彼は、福澤が日清戦争の際出征した木村芥舟の息子木村浩吉へ宛てた手紙について言及している。もし木村が戦死したら、親の面倒は自分が見るが故に、勇ましく戦ってくださいという内容の手紙である。小泉はこれを模範的な態度として取り上げ、「これ実に我々国民の出征軍人に向かって告げねばならぬことではないか」と促した。

また他の知識者は、福澤の思想と戦争目的に対する利用についてさらに述べた。1943年10月には、日本政府は大学生徴兵猶予を撤廃し、徴兵適齢を20歳に引き下げた。その結果、同10月に日吉キャンパスから約500人の学生を含め、数多くの大学生が出征させられた。有名なりベラル思想家であった丸山真男は、慶應の学生達が戦場へ送られた1943年10月の『三田新聞』に「福澤に於ける秩序と人間」と題した記事を寄せ、本当の秩序を維持するには、国民は国家の目標を自分の目標として内面化しないといけないと訴えた。丸山は福澤の最も根本的な思想と前提にした上で、日本人の「自主的人格」の欠落は強い国家の創立への最大な妨げであることを指摘し、それによって国民は「政治」を自分から離れた存在としてみなす結果を引き起こすので、日本国家を本当に成功させるためには、国民はまず「個人の主体的自由」を成立させなければならないと主張した。この意味では、福澤の自由主義と個人主義は国家主義と一致しただけでなく、その必要条件であったと彼は強調した。丸山は福澤について次のように記した。

「個人主義者たることに於てまさに国家主義者だったのである。国家を個人の内的自由に媒介せしめた」<sup>18)</sup>。

これらの言説やレトリックを背景に、日吉キャンパスの物質的景観 (Physical landscape) は変換させられ、また小泉が1941年に「学校こそは国防の最初にして最後の堡塁であらねばならぬ」と述べた発言を反映するかのようになり、真っ白なキャンパスの建物の壁は米軍飛行機からの発見を免れるために黒く塗られた<sup>19)</sup>。さらに1943年10月の学徒出陣以降にはキャンパスから人の気配が無くなったことにより、1944年3月にキャンパスを帝国日本海軍へ賃貸するという状況に導かれたわけである。その時点で廃滅状態となっていた日本帝国海軍は、本土決戦に備えるため陸上に上がることを選択し、新たな司令本部を探しているところだった。慶應の日吉キャンパスは横須賀海軍工廠や東京にある海軍省の近隣であること、送受信がしやすい高台にあること、地下壕が作りやすい地形であること、すぐに使用可能な頑丈な建物が存在していたことなど、候補地として様々な好条件が揃っていた<sup>20)</sup>。さらに、日吉キャンパスを利用することを提案したのは海軍内部に属していた慶應の卒業生であり、そのことも相まって小泉学長が「海軍が利用するなら異存はない」と、使用許可を下した<sup>21)</sup>。

そして、1944年9月より地上にあるキャンパスの建物を使用することだけでなく、約2,000人の軍属労働者及び約700人にも及ぶ朝鮮人労働者によって5キロの地下壕を建設することが決まった<sup>22)</sup>。最終的に1,000人を超える人員が豊田副武大将の指揮下で日吉に働くことと



【写真2】慶應義塾日吉キャンパス地下に所在する旧連合艦隊司令部壕内の様子（筆者撮影2013年1月26日）

なり、この場所から海軍がレイテ沖海戦（1944年10月）や沖縄戦（1945年4月—6月）等の太平洋戦における最も致命的な戦いを指揮したわけである。さらに、慶應の日吉キャンパスから動員された学生兵を含む数多くの若者をこの場所から特攻隊員として死に送ることを指示した。その中の一人であった松浦喜一は、特攻攻撃で沖縄へ向かう最中で悪天候となり、自身が操縦する飛行機ごと引き返せざるを得なかったため命が助かった。幾年後に松浦氏は「特攻出撃で命を落とすのも致しかたないこととと思っていた。（中略）戦争が行われている以上、死を拒むことはできないと感じていた」と回想している<sup>23)</sup>。

## 2. 「近代リベラルとしての福澤」と日吉の戦後アイデンティティー

アジア・太平洋戦争における日本の敗北の後、記憶するための歴史的・社会的な枠組みが著しく変化したように、日吉台地下壕に関する記憶や言説にも大いなる変遷が見られた。1868年から1945年までには、日本が何より目指したのは「皇基を振起す」ことであった<sup>24)</sup>。しかし1945年から1952年のアメリカによる占領期では、国の新たな方向性として特に「民主主義（中略）且つ政治における自由主義的傾向を奨励する」他、「軍国主義」を廃止し、「封建的又は威力主義的傾向を修正」することが決められた<sup>25)</sup>。当初米軍は日吉キャンパスを廃止すべき軍国主義のシンボルとして見なしたため、米第8軍は1945年9月にキャンパスを接收し、1949年10月まで兵舎及び技能養成学校として利用した。同時期、慶應義塾の学生・教師やその時期に塾長を務めた高橋誠一郎と潮田江次は、キャンパスを返還するようにと進駐軍へ要請した。その要請文書等ではこれらの慶應関係者は、日吉キャンパスは軍事的要塞であったと見なされていることに反論した上、戦時中の慶應知識者の軍国主義的な発言を否定し、また以前の福澤思想の軍事的利用を「歪曲」として異を唱えた。その代わり彼らは、「福澤精神」すなわち慶應そのものの本来の意味や姿は、日本における自由民主主義の歴史的開拓者としての役割にあると主張した<sup>26)</sup>。この意味では、米軍による日吉キャンパスの占領は失策であるということだけでなく、日本の復興に対するアメリカの狙いを損なう結果となっていると彼らが暗示したわけである。しかしこれらの「近代リベラルとしての福澤」言説の文脈は、慶應の戦争責任への批判的な分析を妨げた上、日吉台地下壕の存在が彼ら慶應関係者にとって不都合な問題として見られるようになってきた。

福澤の像やその延長線上にある慶應の戦後アイデンティティーの再構築は、敗戦間もないことであった。例えば、1946年5月の「福澤論吉より始めよう」と題した『三田新聞』の記事では学校が「生命であるべき」と主張し、「慶應義塾は一日も早く、福澤精神の本流を理解し、此れから再出発しなければならない」と促した<sup>27)</sup>。同じように、「義塾の復興を論ず」と題した1946年8月の記事では次のように述べられている。

戦時中は福澤精神の軍国主義化と終戦後は福澤に名を借りる側面、非自由主義者の無しと

しない現在、1年後の塾が新しい民主化と建設の遂行を示さない原因は何であらうか。福澤先生は学者としての反面、実に偉大なる実践力を有していたのである。我々は今こそ、福澤先生と我々との間にあるこれらの中間的存在の一切を超越して其の精神を把み、更に其の中にわい曲理解された思想をも屈服にせねばならぬ<sup>28)</sup>。

要するに著者は、戦前や戦時中の「愛国者としての福澤」言説を「わい曲」であると反論し、むしろ本来の「福澤精神」はアメリカと日本の自由主義者の共通ビジョンにより近いものであるとほのめかした。

これらの福澤の修正されたイメージは、GHQに日吉キャンパスへの返還を要請した慶應関係者にとっては大変便利なものであった。例えば、1946年11月11日に、慶應義塾長代理を務めた高橋誠一郎はSCAPのダグラス・マッカーサー宛の手紙の中で、日吉キャンパスの返還は「文化日本の設立のために」大いに役に立つと述べた上、「もし慶應義塾の返還が実現されれば、正しく塾生の安心と義塾の復興に大いに繋がるのみならず、慶應義塾が九十年あまり前の福澤諭吉による創立以来に先駆けた自由民主主義的な文化に踏まえる日本の再建設への大なる貢献となる」と説明した<sup>29)</sup>。

また、キャンパスの返還を訴える機会が1947年5月に再び訪れた。日本の新憲法が施行され、日本における自由民主主義が設立されたのだ。これと時期が重なった慶應義塾の創立90周年を機に、慶應関係者は、新憲法に定められた理想とGHQが目指す目標は福澤諭吉の思想を土台にする慶應義塾の歴史的伝統と根本的に同じであることを主張した。さらに、その延長線上に、継続する米軍による日吉キャンパスの軍事的接收は必要ない上、GHQの目標を阻害してしまう結果となっていると論じた。90周年を記念する1947年5月20日の『三田新聞』では、福澤の思想と大学の復興を関連づける記事を多く集めた特集が組まれた。その中の一つは、「近代日本の偉大な哲学者であつた福澤先生の思想はまさに（中略）日本の行手をてらす炬火でもである」と堂々と唱えた<sup>30)</sup>。

また別な記事では、憲法研究会を先導し、GHQが施行した日本国憲法原稿に影響を及ぼした法学者鈴木安蔵が、戦時中の福澤諭吉の思想の利用を「誤り」として強く批判した。その代わりに、福澤のことを戦後日本の復興を導くことができる近代的な改革者であると強調した。

戦時中、福澤は根本的には「愛国者」であり「国家主義者」であると解説し福澤の初期の論著のうちから、それを立証する数行かを引用した。もちろん、これは誤りであるというのではない。ただ全体として、その主要基盤において初期の福澤の啓もう活動、論著をつらぬくものは、極めて徹底した反封建性、反専制性、平等と自由、自主と独立との近代市民的精神であつたこと自体を、いささかでも否定することは誤りであるというにすぎない<sup>31)</sup>。



【写真3】福澤諭吉の肖像が載る1947年5月20日の『三田新聞』の第一面（不二出版復刻版より）

同じように、慶應関係者らは5月24日に行われた90周年の式典において「近代リベラルとしての福澤」言説を訴え、日吉キャンパスの返還を呼びかける舞台として利用した。例えば、式典の趣意書では、「新日本の憲法に定められ」た理念は「全く慶應義塾がその長い歴史を通じて教え唱え続けて来たものにほかならない」ため、「慶應義塾を建て直すこと」そして接収された校舎の返還は「義塾の為ばかりではない」と説明し、「日本を偽りなく民主化する為には固より、新日本の文教のためにも（中略）ひいては世界の平和、人類の文明の為」であると訴えた<sup>32)</sup>。また演説では慶應塾長、及び福澤の孫である潮田江次は、新しい憲法の施行を背景にし、義塾が福澤の自由主義「伝統の精神をもって国民の先導を勤めなければならないことは明らか」だと解説した<sup>33)</sup>。最後に、来賓として招かれていた昭和天皇も同様のことを示唆し、「慶應義塾が過去九十年にわたり、我が国の文運に寄与して来たことを、深く満足に思う。戦災其の他により学校及び経営の上に、幾多の困難があると思うが、福澤諭吉創業の精神を心として、日本再建の為、一層努力することを望む」と語った<sup>34)</sup>。この後、「天皇陛下万歳」が三唱され、「君が代」が演奏された。



【写真4】慶應義塾創立90周年式典で挨拶する昭和天皇（慶應義塾福澤研究センター提供）

5月の式典後にも、これらの論調は続いていた。例えば、1947年9月の『三田新聞』の論説は慶應義塾の戦争責任を控えめに扱い、日本とアメリカの軍国主義の無意識的な被害者として描いていた。

この間にあつて福澤民主主義の伝統をうけついで、学問の自由を守り続けたわが慶應義塾も今次大戦中日吉校舎の一部を強制的に海軍に貸興することを余儀なくされた。このような特殊事情のため「大学施設は接収せぬ」との連合軍総司令部の建前にも拘らず日吉校舎は米第八軍により接収されたのである<sup>35)</sup>。

そして、1949年1月に潮田ともう一人の福澤の孫であった清岡瑛一が直接的にマッカーサーに訴えを起こし、声明書を渡した。その際に、声明書についてマッカーサー宛のメモには清岡氏によって「慶應義塾はよく日本における知識の自由と民主主義の発祥地であると考えられていることを特に伝えたかった」ということが書かれた<sup>36)</sup>。結局、これらの声明文や慶應の主張の結果として、継続する米軍による日吉キャンパスの接収は、新時代の考え方とずれたものとして扱われるように変容していったのである。よって、1949年3月に最高司令官マッカーサーが、第8軍の司令官宛の手紙で、1949年10月1日までに日吉キャンパスから撤退するよう命

令を下した。「継続する日本の大学施設接管は、占領軍が目的としている日本の教育制度の復活と矛盾している。教育利用のため、これらの施設を返還することは最も重要である」と彼は説明を加えている<sup>37)</sup>。

かくして、「近代リベラルとしての福澤」言説によって日吉キャンパスの返還という成功を収めることができた。しかしそれと同時に、日吉の戦争の歴史は言説的に慶應義塾の自由主義の近代史によって逆の意味に変換させられたことにより、(非)記憶する文化を導いたわけである。そしてこれらのことにより、日吉における旧海軍壕のような軍国主義の痕跡は物理的、及び記憶的景観から抹消される結果となった。1945年～49年のキャンパス返還運動の時期の『三田新聞』への投稿者は一貫して、学問的独立の先導者としての慶應義塾の像を賛辞するように、また美化され理想化された戦前・戦時中の日吉キャンパスを感慨深く表現した。ある1947年の記事の執筆者は、「かつては若草もえる日吉の丘のま白い学堂に塾をしたう若き人びとを招じ入れたものだった。われわれも幾年か前にあの丘にのびのびと学び、あそびそして友と語り合った楽しい思い出を決してわすれることはできない」と語った<sup>38)</sup>。また同年の「忘れ得ぬ丘」と題した記事には、「青春の血をたぎらせて学びそして遊んだ日吉の丘、かつてこの丘に通った者にとっては郷校であり、まだ知らぬ者にとってはあこがれである。だが共に願うことはこの丘が一日も早くわれわれの手に帰って来ることのみであろう」という記述があった<sup>39)</sup>。これらの論調は、「なつかしの日吉」等という表現を含めた1949年の記事まで続いた<sup>40)</sup>。そして1949年10月のキャンパス返還の前夜に、ある『三田新聞』の学生記者が、戦時中米軍爆撃機から装甲するために黒く塗った日吉キャンパスの建物はようやく戦前の白い姿に戻されることに注目し、「医学部予科校舎は長い戦争のあかをおとすかのように真白く御化粧中で、話によると文科系も真白にするとの事だ。あの戦争の末期、真黒に塗られたコールタールの臭い中で勉強した事など夢のようだ」と述べた<sup>41)</sup>。つまり学生記者の考えでは、日吉キャンパスの修復は「夢のよう」に忘れつつある、黒い、コールタール的な「あか」(垢)と比較された戦争の有形的・無形的な痕跡の排除を意味したわけである。

同様に、1949年のキャンパス返還後にも、慶應関係者は旧海軍地下壕の存在を抹消しようとした。例えば1952年に、潮田は日本政府への手紙で「地下壕は所々に多数の入り口があり、しかも扉がなく、学徒及び近隣者の事故防止に苦慮して居ります。且又地下壕上が将来建築予定地となり、高層建物基礎構築に際して甚だしい支障があると考えられます」と書き、「地下壕の復旧」を要請した<sup>42)</sup>。また1955年の要請文で潮田は「本塾内地下施設」は「旧海軍が本塾の了解なく無断施設を行いたるもの」であると述べた上、1956年に「現状で放置することは教育上は勿論のこと、子供の遊び場或は不浪者の宿となることもあり管理上不安である」と説明した<sup>43)</sup>。これらのことを踏まえ、潮田は日本政府に地下壕をセメントで埋め、入口をコンクリートで閉鎖するための予算を提供するよう要求した。

それ以降の高度経済成長期と都市膨張によって、潮田の主張が世間一般に受け入れられた。その一つの例は、国が1974年に導入した街中や住宅地に所在する旧軍地下壕と防空壕を埋め戻



【写真5】米軍占領下の日吉キャンパス：戦時中建物が黒く塗られた様子が残る（慶應義塾福澤研究センター提供）



【写真6】日吉キャンパス敷地内にある日吉台地下壕の出入り口（筆者撮影2013年1月26日）

す特殊地下壕対策事業に対し、地下施設の陥落危険性を懸念した市民やメディアが高く評価したことが挙げられる。1973年の『朝日新聞』には「危険戦時中の地下壕」と題した記事が掲載され、政府が地下壕を撤去するよう促していたことがわかる<sup>44)</sup>。また1975年の『横浜読売』の記事では、日吉台地下壕のような旧軍の遺構は「やっかいもの」として表現され、埋め戻し作業を「遅すぎた戦争処理」として賞賛している<sup>45)</sup>。これらの場所はようやく「戦争の悪夢とともに(中略)間もなく埋められる」とも記されている<sup>46)</sup>。そしてついに1975年及び1979年に慶應義塾は日本政府から日吉台地下壕を部分的にコンクリートで埋め戻すための予算を確保した<sup>47)</sup>。

### 3. 争われた遺産としての日吉台地下壕

日吉台地下壕の物理的抹消に対する最初の抗議は、1989年当時慶應義塾高等学校の教師であった寺田貞治とその他地域のサラリーマンや主婦128人を中心に日吉台地下壕保存を進める会(後に日吉台地下壕保存の会)が結成されたことから始まった。保存会は、この時期に突然結成されたというわけでは決してない。1970年代より他の市民団体はすでに戦争記憶保存の重要性を訴えていた<sup>48)</sup>。戦争体験者が少なくなりつつある中、どのように風化を乗り越え、戦争記憶を語り継ぐことができるかは重大な問題であった。こうした背景の中、保存会は戦争遺構を戦争体験者の代わりに戦争を語るができる太平洋戦争の「歴史的な証人」や「貴重な遺産」として新たに評価しようとしていた全国の戦争遺跡保存運動の最前線に立っていた<sup>49)</sup>。寺田は保存会結成の年に以下のように説明していた。

時、まさに戦後40年しだいに悲惨としか言い様のない戦争を知らない世代が人間の大半を占めつつあり、殊に直接それを経験し次の世代へと伝える事の出来る人が極少数となってしまっていると言える。(中略)または物が世の中から消え去り、再び人間に愚劣な行為の繰り返しをさせる事にもなりかねない。結局、人を残す事は不可能であるので、せめて我々がその人達から学び何か他の人々に考える鍵を与える物を残さねばならないと考えている<sup>50)</sup>。

これらの保存会が使用した「遺産言説」は一般市民やメディアの高い支持を得て、1995年までに730人もの会員を有することを達成した<sup>51)</sup>。毎月のガイド付き地下壕見学ツアーの実施、季刊会報の出版、歴史的な資料が展示される「平和のための戦争展」の企画等を行い、文化財保護法の元に史跡として日吉台地下壕を保存するよう、慶應義塾や自治行政、国に要請した。しかし要請を受けた関係者や管理者は、遺産という扱いではなく、地下壕を不都合な過去を想起させるやっかいなものとして考え続けていた。その結果1990年には横浜市が地下壕を「危険」、「教育上も問題である」、さらに「地権者に迷惑」と判断し、「地下壕の埋め戻しや入り口

の閉鎖などの対策」を勧めた<sup>52)</sup>。また横浜市は、地下壕が所在する土地の地権者、その中でも最も大きな地権者である慶應義塾が地下壕の存在について「それほど良い印象を持っていない」ことを指摘し、「地下壕の利用にあたっての承諾が容易に得られるかどうかは問題であろう」と同1990年の報告書で記した<sup>53)</sup>。さらに同じ報告書によれば、地権者は地下壕を史跡として指定することに対して反対であり、「大勢の見学者が来るのは困る」そして「生活が煩わされたり、上部に建物が建てられないようになるのは困る」ため、地下壕の存在を「あまり話題にして欲しくない」ということが記してあった<sup>54)</sup>。かくして、ローラジェーン・スミスの表現を借りて言えば、遺産としての地下壕という概念は「本質的に不調和と争われた」わけである<sup>55)</sup>。

それにも関わらず、「遺産言説」を通して日吉台地下壕が、戦争や残虐からの遺構を負の遺産として保存しようとする、より広範な全国的・世界的な運動に加わることができたため、影響は大きかった<sup>56)</sup>。1992年に日本は世界遺産条約を受諾し、のちの1995年第二次世界大戦終結50周年にあたり国の最も代表的な戦争遺跡である広島原爆ドームを世界遺産として推薦した。また同1995年に文化庁が、日吉台地下壕のような旧軍施設をも対象にする近代遺跡調査を実施した。さらに1997年に戦争遺跡を文化財として保存するために全国から80団体が参加する戦争遺跡保存全国ネットワークという包括的組織が結成された<sup>57)</sup>。

これを背景に、慶應義塾は旧海軍地下壕に対する立場を考え直した。2001年に学校は400万円を地下壕の部分的修復のために当て、また初めて慶應の敷地内での保存会主催の見学を許可した。その結果、見学に参加する人数が2000年には499人だったものが2002年に1,130人まで著しい増加を見せた。最も多い時には、保存会は一年に合計で2,732人を48回に渡り地下壕の見学に案内した<sup>58)</sup>。さらに、2008—9年に日吉キャンパスで新しい体育館を建設する工事の際に三つの地下壕出入口が新たに発見されたことに対し、大学は調査及び歴史的評価を定めるために、外部専門家で結成される委員会を設置した。調査終了時、委員会は慶應に以下のように報告した：

日吉台地下壕は、日本近現代史研究のみならず、世代を超えたコミュニケーションの触媒となることで戦争の記憶を後世に伝えることを可能にする、高い学術的・教育的価値を持つ文化財として評価しなければならないのである。(中略) こうした文化財がキャンパス内に存在することを、決して研究教育環境の整備・改善に対する障害として捉えてはならない。むしろ、今回の地下壕入り口の発見を固定的に捉え、大学の研究教育環境の改善と文化財保存問題の両立を果たすとともに、貴重な文化財を持つ大学として、その積極的な利活用を含めた慶應義塾らしい研究・教育活動を構築していくためのきっかけにすべきである<sup>59)</sup>。

慶應は委員会のこれらの助言を踏まえ、三つの内二つの出入口を破壊しないよう、工事中

の体育館を60メートル移動させた。この結果は、大学側がある意味「遺産言説」を受理したと解釈することができる。

かくして「遺産言説」によって日吉台地下壕の存在がある程度認められるようになった一方、新たな抗議者も現れた。先行研究で、残虐や苦難にまつわる遺産を国家的アイデンティティーの語りにも融合させる難しさが指摘されてきた<sup>60)</sup>。同様に、ナツコ・アカガワが述べたように、日本政府による美化された文化遺産を文化的外交の工具として利用すること、さらに海外へ「日本の国家主義(nationalism)の発信する」ための利用は、戦争遺構等の負の遺産の犠牲や抹消の上でできていると考えられる<sup>61)</sup>。1999年-2000年に安全性についての懸念、及び文化財としての価値についての疑問を理由として、横浜市は保存会の要求を無視し私有地にあった日吉台地下壕の一部をコンクリートで埋め戻し作業を行った<sup>62)</sup>。また同じように、2013年に横浜市は民間建設会社による日吉キャンパスの南東側に近隣する民有地に所在する日吉台地下壕の一部の舗装を許可した。その時に、慶應義塾大学教授安藤広道は、「地下壕群を埋蔵文化財包蔵地にしていなかった市教委の消極性が破壊を招いた」と、地下壕の損壊を横浜市に対し責任追及した<sup>63)</sup>。それに加え、志村彰太は『東京新聞』でこれらの批判をさらに大きく取り上げ、「多くの国民を犠牲にした<負の遺産>でもあることから、国や横浜市は文化財や史跡に指定していなかった」と記した<sup>64)</sup>。同時に、ある慶應義塾大学の学生が『朝日新聞』に「残念なことに、関心がある学生はおそらく一部で、ほとんどは(地下壕の)存在を知らないまま卒業していく」と話したように、地下壕破壊の背景に慶應義塾の戦争史とその戦後の語り方や記憶の継承の仕方が潜在していたことを確認することができる<sup>65)</sup>。

## 終わりに

遺産として争われた日吉台地下壕の本質は、日吉の場所的伝記、とりわけ慶應義塾の日吉キャンパスとしての歴史的アイデンティティーに端を発する。日吉台地下壕にまつわる言説は変遷し、複数の権力の狭間で揺れ動いていた状況により、本論文が取り上げた「(非)記憶する文化」という忘却と記憶の二元的な過程に従事し、さらに日吉の物理的・記憶的景観に対して有形的な変化を生じさせた。本論文は、日吉台地下壕に対して特に影響した三つの言説を提示した。一つ目は、鎌田栄吉や小泉信三のような戦前・戦時中慶應のエリートが国粹的忠義を助長させるために義塾創立者である福澤諭吉の思想を活用した「愛国者としての福澤」言説であった。本論文が主張したように、これらの言説的背景において、慶應は学生を戦争へ向かわせ、帝国日本海軍にキャンパスを貸与し、連合艦隊が日吉キャンパスに司令本部地下壕を建設した。二つ目は、戦後直後に米軍に接収された日吉キャンパスを取り戻すために、当時の慶應塾長潮田江次とその他の慶應関係者が用いた福澤を近代的自由主義者として描いた「近代リベラルとしての福澤」であった。しかし過去の戦争目的のために利用された福澤の思想や慶應における軍国主義の歴史を無視し、あるいは控えめに扱うことによりこれらの言説は(非)記憶

する文化を導いたわけである。それに加え、本論文が提示したように「近代リベラルとしての福澤」言説は、日吉台地下壕のようなかつての軍国主義の有形的な痕跡を、日吉からの抹消することを容易にさせた。三つ目は、1980年代より戦争記憶を後世に継承する方法として地下壕保存を訴えた日吉台地下壕保存の会が使った「遺産言説」であった。しかし、戦争の文化的記憶としての地下壕遺産化に対して、慶應義塾、横浜市、そして日本政府は慎重に接し、反対してきた。かくして、遺産としての日吉台地下壕という概念は、過去から変遷を遂げてきた言説や（非）記憶する文化の結果に対して張り合ってきたと結論づけられる。

#### 【注】

- 1) 本論文は元々、“Cultures of (dis)remembrance and the Effects of Discourse at the Hiyoshidai Tunnels” という題で *Japan Review*, No. 31 (Fall 2018) に英語で掲載されたものである。
- 2) Nora 1989: 9; Assmann and Czaplicka 1995: 129, 130.
- 3) Smith 2006: 13.
- 4) Foucault 1982: 53.
- 5) Smith 2006: 13、及び Harvey 2008: 19.
- 6) Hunt 2010: 5.
- 7) *Erinnerungskulturen* については Erll 2011: 49 を参考。
- 8) Wodak and Meyer 2009: 10.
- 9) Stig-Sorensen and Rose 2015: 13.
- 10) 福澤1872.
- 11) 慶應義塾1900.
- 12) 鎌田1920.
- 13) 井上2013: 131.
- 14) 鎌田1933: 161, 181.
- 15) Fukuzawa 1966: 415、及び鎌田1933: 186を参考。
- 16) 神山2003: 93.
- 17) 小泉1937.
- 18) 丸山1943.
- 19) 「報国隊結成式行はる」 1941.
- 20) 日吉台地下壕保存の会2011: 30-31.
- 21) 日吉キャンパスを海軍に貸与することは小泉の意図であったと、当時の日吉キャンパスより徴兵された元学兵らが証言している。前田1993、及び増井1994を参考。また白井淳は同様のことを指摘している (2003: 92)。
- 22) 日吉台地下壕保存の会1993: 15.
- 23) 遠藤和希、金武幸宏、佐々木真世2009.
- 24) 「五箇条の御誓文」.
- 25) 例えば、“Summary of United States Initial Post-Defeat Policy Relating to Japan,” (1945) を参考。
- 26) 「義塾の復興を論ず」 1946.
- 27) 「福澤論吉より始めよう」 1946.
- 28) 「義塾の復興を論ず」 1946.
- 29) Takahashi Seiichiro to General Douglas MacArthur 1946.
- 30) 「九十週年祭典いよいよ展開」 1947.
- 31) 鈴木1947.
- 32) 慶應義塾編1964: 14.
- 33) Ibid.: 15.
- 34) Ibid.: 17.
- 35) 「日吉返還を要望」 1947.

- 36) Ushioda Koji to General Douglas MacArthur 1949.
- 37) Douglas MacArthur to the Commanding General of the Eighth Army 1949.
- 38) 「日吉」1947.
- 39) 「忘れ得ぬ丘」1947.
- 40) 「なしかしの日吉還る」1949.
- 41) 「残る豊かな慶應色接收下の日吉訪問記」1949.
- 42) 潮田1952.
- 43) 潮田1955、及び潮田1956.
- 44) 「危険！戦時中の地下壕」1973.
- 45) 「地底にまだ戦時」1975.
- 46) Ibid.
- 47) 小野1975、草川1975、高熊1975、慶應義塾1975.
- 48) 「東京大空襲進む記録保存」1971.
- 49) 日吉台地下壕の保存を勧める会1989、及び水戸1989.
- 50) 寺田1989：9-10.
- 51) 「連合艦隊日吉地下壕を保存する会が発足」1989、「旧海軍が中枢部設置、日吉台の地下壕保存を横浜の市民団体など要請」1992、「生かせハマに眠る戦史」1993.
- 52) 横浜市1990：1.
- 53) Ibid.: 24, 16.
- 54) Ibid.: 24.
- 55) Smith 2006: 4.
- 56) Meskell 2002、及びRico 2008を参考.
- 57) 「戦跡保存へ全国ネット来月20、21日長野で結成大会」1997.
- 58) 日吉台地下壕保存の会2000：3、日吉台地下壕保存の会2002：3、日吉台地下壕保存の会2018：5.
- 59) 新井2010.
- 60) Logan and Reeves eds. 2008.
- 61) Akagawa 2014: 28.
- 62) 高秀2000.
- 63) 古沢2013.
- 64) 「「負の遺産」文化財指定なく」2013.
- 65) 「慶大に沈む連合艦隊、地下壕に司令部跡」2005.

#### 【参考文献】

- Akagawa, Natsuko (2014). *Heritage Conservation and Japan's Cultural Diplomacy: Heritage, National Identity and National Interest*. Routledge.
- 新井揆博 (2010) 「充実した諮問委員会の答申に学び日吉台地下壕の保存、活用を考える」日吉台地下壕保存の会『会報』第97号。
- Assmann, Jan, and John Czaplicka (1995) "Collective Memory and Cultural Identity." *New German Critique*, 65: 125-33.
- 大学令 (1918) 『官報』第1903号。
- Douglas MacArthur to the Commanding General of the Eighth Army (1949), SCAP records, National Diet Library.
- 遠藤和希、金武幸宏、佐々木真世 (2009) 「特集：戦争と義塾」慶應塾生新聞会。  
『Jukushin.com』 <http://www.jukushin.com/archives/3760> (2018年5月29日閲覧)。
- Erl, Astrid (2011) *Memory in Culture*. Palgrave Macmillan.
- Foucault, Michel (1982) *The Archaeology of Knowledge: And the Discourse on Language*. Vintage.
- 「「負の遺産」文化財指定なく」(2013) 『東京新聞』。
- 古沢範英 (2013) 「日吉台地下壕周辺に古墳時代の横穴墓、関係者「破壊拡大避けて」」『朝日新聞』。
- 福澤諭吉 (1872) 『学問のすゝめ』青空文庫。
- Fukuzawa, Yukichi (1966) *The Autobiography of Yukichi Fukuzawa*. Columbia University Press.

- 「福澤諭吉より始めよう」(1946)『三田新聞』。
- 「義塾の復興を論ず」(1946)『三田新聞』。
- 「厳たり豊田長官の訓令、皇国隆替・本戦闘にあり」(1945)『朝日新聞』。
- 「五箇条の御誓文」(1867-1871)『太政類典第一編』国立古文書館。
- Harvey, David (2008) "The History of Heritage." In Graham, Brian, and Peter Howard, eds. *The Ashgate Research Companion to Heritage and Identity*. Hampshire, England: Ashgate Publishing.
- 「日吉」(1947)『三田新聞』。
- 「日吉返還を要望す」(1947)『三田新聞』。
- 日吉台地下壕保存の会編 (1993)『日吉台地下壕』。
- (2000)『会報』第54号。
- (2002)『会報』第63号。
- (2011)『フィールドワーク日吉・帝国海軍大地下壕』平和文庫。
- (2012)『戦争遺跡を歩く、日吉』。
- (2018)『会報』第135号。
- 日吉台地下壕の保存を進める会 (1989)「日吉台地下壕の保存を進める会入会案内」慶應義塾大学所蔵。
- 「報国隊結成式行はる」(1941)『三田新聞』。
- Hunt, Nigel (2010) *Memory, War and Trauma*. Cambridge University Press.
- 「生かせハマに眠る戦史」(1993)『神奈川新聞』。
- 井上琢智 (2013)「鎌田栄吉の経済思想史：慶應義塾における経済学教育」『経済学論究』(67) 1 : 129-54.
- 伊藤喜之 (2014)「地下、朽ちる戦争遺跡 空襲に備え軍施設」『朝日新聞』。
- 十菱駿武と菊池実 (2002)『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房。
- 鎌田栄吉 (1920)『三田新聞』。
- (1933)『国民の三大要道』国民工業学院。
- 「危険！戦時中の地下壕」(1973)『朝日新聞』。
- 「旧海軍が中枢部設置、日吉台の地下壕保存を横浜の市民団体など要請」(1992)『朝日新聞』
- 「九十周年祭典いよいよ展開」(1947)『三田新聞』。
- 慶應義塾 (1900)『修身要領』青空文庫。
- (1964)『慶應義塾百年史第2巻第2部』慶應通信。
- (1964)『慶應義塾百年史第3巻』慶應通信。
- (1975)「日吉塾所有地内の地下壕の埋戻並びに構築物撤去について」慶應義塾大学所蔵。
- 「慶大に沈む連合艦隊、地下壕に司令部跡」(2005)『朝日新聞』。
- 小泉信三 (1937)「忠烈なる我が将兵」『三田新聞』。
- 神山四郎 (2003)「戦時下の三田に学んだ経験から若い諸君へ」白井厚、浅羽久美子、翠川紀子編『証言太平洋戦争下の慶應義塾』慶應義塾大学出版会。
- 草川正より小野一郎への手紙 (1975)「日吉町地内特殊地下壕対策工事について」慶應義塾大学所蔵。
- Logan, William, and Keir Reeves (2008) *Places of Pain and Shame: Dealing with "Difficult Heritage."* Taylor & Francis.
- 前田晃利 (1993)「日吉台地下壕当時の関係者の思い出話3」日吉台地下壕保存の会『会報』第25号：頁6-7.
- 丸山真男 (1943)「福澤に於ける秩序と人間」『三田新聞』。
- 増井潔 (1994)「日吉台地下壕当時の関係者の思い出話4」日吉台地下壕保存の会『会報』第27号：頁7。
- Meskell, Lynn (2002) "Negative Heritage and Past Mastering in Archaeology." *Anthropological Quarterly* (75) 3 : 557-74.
- 水戸多喜男 (1989)「会長挨拶」日吉台地下壕保存の会『会報』第1号：頁1。
- 「なしかしの日吉還る」(1949)『三田新聞』。
- 「残る豊かな慶應色接収下の日吉訪問記」(1949)『三田新聞』。
- Nora, Pierre (1989) "Between Memory and History: Les Lieux de Mémoire." *Representations*, 26: 7-24.
- 大角武より潮田江次への手紙 (1956)「旧海軍が掘さくした地下防空壕に対する現状復旧の要請について」慶應義塾大学所蔵。
- 小野一郎 より横浜市道路局長への手紙 (1975)「本塾日吉地区地下壕の埋戻しについて」慶應義塾大学所蔵。
- 「連合艦隊日吉地下壕を保存する会が発足」(1989)『毎日新聞』。

- Rico, Trinidad (2008) "Negative Heritage: The Place of Conflict in World Heritage." *Conservation and Management of Archaeological Sites* (10) 4: 344-52.
- 白井厚、浅羽久美子、翠川紀子編 (2003) 『証言太平洋戦争下の慶應義塾』慶應義塾大学出版会。  
「戦跡保存へ全国ネット来月20、21日長野で結成大会」(1997)『朝日新聞』。
- Smith, Laura Jane (2006) *Uses of Heritage*. Routledge.
- Stig-Sorensen, Marie Louise and Dacia Viejo Rose (2015) "Introduction: The Impact of Conflict on Cultural Heritage: A Biographical Lens." In Stig-Sørensen, Marie Louise, and Dacia Viejo Rose. *War and Cultural Heritage: Biographies of Place*. Cambridge University Press.
- "Summary of United States Initial Post-Defeat Policy Relating to Japan (Informal and Without Commitment by the Department of State)," (1945), U.S. National Archives & Records Administration (RG353), National Diet Library.
- 鈴木安藏 (1947) 「近代日本政治における福澤イズム」『三田新聞』。
- Takahashi Seichirō to General Douglas MacArthur (1946) "Requests for Release of Hiyoshi Campus." SCAP records. National Diet Library.
- 高秀秀信より大西彰への手紙 (2000) 「日吉台海軍艦政本部地下壕」の保存等について (回答) 日吉台地下壕保存の会蔵。
- 高熊恭弘より慶應義塾大学への手紙 (1975) 題名なし。慶應義塾大学蔵。  
「地下壕保存の陳情書を提出」(1995)『朝日新聞』。
- 寺田貞治 (1989) 「日吉台地下壕について」『生協』48: 8-10。  
「寺田貞治、日吉台地下壕保存の会事務局長」(1993)『朝日新聞』。
- Ushioda Kōji to General Douglas MacArthur (1949) SCAP records. National Diet Library.
- 潮田江次より広瀬節男への手紙 (1952) 「土地の接収解除並びに地下壕の復旧についての嘆願」慶應義塾大学蔵。
- 潮田江次より関東財務局長への手紙 (1955) 「旧海軍施設の処置について」慶應義塾大学蔵。
- 潮田江次より大角武への手紙 (1956) 「本塾日吉地区所在地下防空壕の措置について」慶應義塾大学蔵。  
「忘れ得ぬ丘」(1947)『三田新聞』。
- Wodak, Ruth and Michael Meyer (2009) "Critical Discourse Analysis: History, Agenda, Theory and Methodology." In Wodak, Ruth, and Michael Meyer. *Methods of Critical Discourse Analysis*. Sage.
- Yamasaki, Yoko (2017) "New education and Taisho democracy 1900 to 1930s." In Tsujimoto, Masashi, and Yoko Yamasaki, eds. *The History of Education in Japan (1600 - 2000)*. Routledge.
- 横浜市港北区区政推進課 (1990) 「日吉台地下壕利用計画策定調査」横浜市。  
「東京大空襲進む記録保存」(1971)『読売新聞』。  
「地底にまだ戦時」(1975)『横浜読売』。